# 寒貝の婦人

下

へ13
2901
12

へ13
門
2901
號
12
巻

# 春色梅美婦禰巻之十二

江戸　爲永春水著

## 第廿三回

[illegible]

お糸ゞ家出して行方も知れぬ柳川亭の母もお京ゞ方あてもなく峯次郎の父母も知らぬ重ねて彼是[illegible]

[illegible]

[illegible]

家よ不埒 後ゝ両方の母も思相の尽るかどわかし[illegible]

峯次郎のゆゑ八先さて重只お糸の行衛とのゝ案じ

昭和九年
七月五日
購求

入て苦労ゐ乱もしてくれ涙のこゝ養けるがお桑の
家出しる四日目の彩兼くに公易くせ〜越蛮人萬蝶が
柳川亭の門口ゑ番「ヨヤ〜大変ゐ彩寐がうざゐエモウ
お客が来て休む時分ごのあお見世も明るひでトのふを
開分て買ようゑ出るお桑の母「ヨヤ萬蝶さんお早ひね〜
番「ナニ〜出ま早くなるサ。此頃お桑さんの寐がうゐ彩
さんまを引ぢう込まて彩遅くおるん兵成ごのざサ〜
お桑さんお紀兵成番蝶が急用がありまして。アレ〜苦く

遅ひ〜ト例のお様の元気よく産婆へ上り番「ヤレ〜
中のうでなく買でな〜お桑さんハ二階へお寐を眠る人
そまじやア彩生ひたぐアレ〜番「アレサ番蝶さん桑ハ
寐て人屋るひハよト言ぐゐ眼ゐ涙を浮やしを番蝶ハ
早くも見とゑ番「ヨヤ母さん涙ぐんでお在るまるよ
彩彩ゑ兵成ごの人ちセお桑さんハアア彩所へお出の心
おざるまて母「ナニサ彩所とりゑ當ゐあまゑ寐ゐ〜ゑ
けまども此も彩ゑ先ハ初産ひりゑまく私ハ苦労ゐ

ありて疝気が痛んでありしのち 爺「エヽ実に公のうまい
毎〳〵空を仕るのうな今月で丁度四月目になるけれども
あれも使うぶ あれのごとく海川へでも這入ふたるまひるを
可解ものでありまひトいふも墨うて渡の声音さもづれ
爺蝶も元気をうまひ毎の側へ腰の後なる板よ動止
居ても爺〳〵イヤもまひ アノ大変なるものが出来るまで工作板りの
りて於奈女が手紙を読みまひたのでぐざるまひ板
でも深ひ理言のあるものそぐざるまひうが私も今うう

不及ぬ 爺われも出せトお板が少しも分からぬハテ何の
トいへば毎お奈の書置蝶の出して看せる爺「是ぢや
鎌倉の尼寺の方へ毎彩もあるとのへうう途方の暮
へまの板ぞ仕板へあるまひう考へてお呂チ爺「ハテ困ること
ものぞ分板も外の事といふ能く考へるものが上の是非在
家を捨して見るまひ飯縄権現さまの宮を願ふのごと
是より爺蝶へ飯縄の宮利益を委しく語るゆえ毎へ
命も代りうく思ふ奈みのあるれば亦手相法を及しが

毋ハ三ノ伺ホ一セも巻次郎ガ竹二も家門ヘ倚ヶ掛ガ
伺ガ所ヘ行テ探ンデ居ラウ竹家ヘも モウ十日の解も白を
出キラウひラウお条も寄ジテ居る家中 実家のお京ガ
巻次郎の毋と同伴ホ来テ竹方ホだラウ巻ガ居る様子
男ハ七根ヲ言さものごクラウお条も気を紛出シテ竹家ヘ
ラウホ月さのごラウ男ラウハ毋ハ巻次郎ホ外でお逢の
まくハラウさ久 巻ハ十二ちゃ逢まハとも 実ハ跳巻
きんの所ヘ止宿テ安ラウお条さんホ用ガあリテ来さのデ

おざカまハのサ 毋ハエイ巻ガ宅とラウト言ヲテ巻蝶もさラ
分キ 巻ハ平ナニ伺サ巻さんのお宅ドヤア白ホ巻さんガ常
ホ伺ガ易ク さるお家ヘ行テ来所ホ巻さんガお在ス成テ
ラウ私ガお留ホラウヲまくさのサトさとガホ物別テ如ヲラウさ
巻蝶ヲヲども お条の伺ガ来ルト大変ホ驚ク
ゆ表巻次郎の張シテ居る 房吉の家のラウ伺ガと言ヲ
たラウヲ白ヲ言葉ホのさ一つくしラウ毋ハ元来お房のラウハ
公ヲラウねど巻次郎の 放ガ居る所ガ在ラウんと表ハシテ

おきうさしあて
お房の味へうつる

居るものれば善蝶ホ向ひ母アノ善蝶さん仕様で
毒蛾のふ大変ぎが出来て娘の形乗が知れるくるつと様に
なりどうふ仕も角も宮早隈しと物をまる様ホ宮居ふ
きるひるぎるまア家の居る所を委しく聞きてお呉れな
支が出来ぎホお家の家ホ居るひるを出してやく此
家へ連て来てお呉チ善八仕様も聞いこまぎ母ヲヤく
仕様をお様なるる様お言ぎ毒ホ家ホ逢まるひの人ト
聞きて贅時善蝶もきつくしぶ。老ても斯ち情強ぎの



出来ぎ上ホ仕るも聞きるを乃様もるを思素を極ホ善
実ホお様さん明十ホ出こるひるぎけまぶも仕様でおれ
ぎゆも海まホまひ一きくくるのおるも大変ホ
善房をしと海てお在ぎふ支で様が今彩此方へ来ホし
来さのぎふ母ヲヤお様ホをお言ひのぎをしてあのふ
ホ雑人のるぎま善十廿房者さんのるものぎるまに
ケ母ヲヤく家のるを様ホ房ぎ聞て海て居るとふの
久善十二仕様しを様るるを彼地で様あのこ人

ありやせん　私も今此所へ来てお同中とのごうのう　母へ
申し三勢ぐらふわへ　夫のしたへ　物故お房が泣て苦労せしと
屋うのごらふよ　爺へ　さまたげサ　家次郎さんが腹物が出来て
十日ばかり絶食同様でこうくまると　命がうくと医師が
ふうふう驚きえんの苦しむのを見て　房吉さんハ泣ばかり
看病しと居た成し　亦私家さんばかりといりしより
実家へ久しくお帰ん　成る中が出来の大病ばかり
きしうくる夫もあり　房吉さん一人で看病も知れ本を

第一のすぐあれと第　諸方へ知らせざれ　亦そハ後だ
お医師さまを治り　頼るとふふ　そこ訪で早くなる家さんを
お嫁中変とふふ　伝サト　同そのよう　母親亦一場の
苦労の一件　第とそ　知もうふ　しば　母へ　物語しまと家
次郎が不快　うとのつそ　お房の宅へ行て　家へ付とふん
だへ　第へ　十二サ　病れが　及ぶつと　房吉さんの所へお出
成とのでハ　房吉さんの宅ハ　病でお在成て
後中ハ　病へ出しとふ　大病へ　成まとのごう

大変　母へ〳〵とそまじやア蓑次郎ハ辰己へ行て姫御
お房の所へ立より居さうなエ　爺ハ　そてア然ぞ　どざるまさう
母　イヤ〳〵　寄まさうなどもゴノウ　他様よ同さても　親達が
面目なこけごト　湯島を注ぞうなう
是より爺蝶ハお房と蓑次郎の深き中なるこを
さぐる姉妹の心〳〵ゆそ　お茶の義理合　房吉の三兎
づくのうまを委〳〵仕て　損徒ニ乃びける
○久しや只　附け　るみ　ゑ　面の　面　春泉

斬る縄のあるぞとも　知ぬ　ねど　お京ハ発明の蓑次郎の
行衛をたづ〳〵尋出さば　お茶の行衛も　思ひの外　知まる
るもあらんと　彼婦美川　るお房を尋て　對面し　是ハ
同　大方ハ居所も　知まるこけとなるべし　亦　然なくも
お茶の家　出せ　るを　姉　うまび　お房ハ　告て　たゝ　笞
も　同　高　じを　公　分　しの　お母の　茶　ハ　内　〳〵　みて　ちの　ゆを
告　彼婦美川の　枝　本　座　ふ　張　居　せ　父の　所　へ　行　ある
ひきゆてゆ女と小傳を連て家を立出婦美川ハいろう

あが下女とゆかをば父の所へ待せ置父も源七只一人
和泉町なる房吉の許へやうゝと尋ね行き委しく変
けまば此節は家内病人ありて見板をも引て居るあ
るゆゑ先お房の門口ゝ寄ゐ内の板戸を伺へば
アレサ峯さん気をつけてお呉よヨウ峯さん
こんな苦しひ久。アレ分相せうのう。サア此お薬を
おあがりヨト優声のそのお房の声峯さんと優声を
聞てお吉は胸さわぎ思ふまど表の格子戸案内



もなくガラリと引明け中妾居の漆戸を明ら入
先免成まゝお房さんのお家へ此宅でおざるまゝトト
ひとゝもお房は峯次郎の病ゝげゝく苦痛
労り茶渡せも矢へゞ程なれば お京さんとも
入口の方を見向もせぬ きへお吉さん あつよさんの
ひが手渡アノ茶碗へ水を汲でお呉成ヨアレサ峯
さん引ト 此ぶは峯次郎 気をつゝ 体と看
ゆるゆゑお京は そゞあて来ゝ家 ゝまゞ 案ゝ居る

所へあがねべ参所の方へ走り行き茶碗を探して水汲
峯次郎の家の側へ持参りしをお房は清水口のあく
峯次郎の顔へ水を吹掛け注声のそき「峯さん〳〵
峯へヲイ〳〵案じなさんな京へ峯次郎さんおもが付き
まして久トのお弟峯次郎はおし眼を開き四辺を見
まわし「峯へヲヤお京様へ何時のうゐ来たのぞ京へアノ兄今
まる
峯へまして京へ未お房さんはれ様探もいらしませんヨト
言へまして お房ハ物りし「ヲヤ私きやア お隣のお父さん

だと思ひて居りまして京へお京さんでどざりまして真平堪
成まして。アリ「師ろと差一とれ浪うふお成るべ私き夢
行狂せうと思ひまして京へ私も表へ遠入なぐらお兼
さんが注意ろで峯さん〳〵とお呼びのを聞まして京へ
胸グドツキリとして案内もいさぎ宅へ遠入りまし
ヨヨ堪兵しと下まして「イモ行狂のうして私ハまこと
遅上て義中の様よりまして京へお兼さんぐろお隣の
お内義さんぐろ知ませんと亦行狂よ水を汲でおい

えんぜとおまへは立やまへ〜こん内兎歳まへショトをふ御く
義理合を述る中も家内家中ふ幻を分て介抱い勝り
劣らぬ両女の実意ありく弟さへ書つゝ〜新〜彼已
まる間ふ家内家中の苦痛も思ひの外ふ治りく故お房へ
あんど
安堵〜七きへアノ丈じやアアアなを放〜まへヨ折ふ用
お京さんゞ始て お出成さのごろう 京へイるとハ出ずお稼
きまるまへチ私へ出稼る京へ存ずませぬ お家柏ふ見非
お見ふくらるひけまべきらるひふ出来まへくらるふ

参つさのでおざるまへヨ家へ伝故毎人さんが行とぞ言つさ
のう 京へイをナケニ然でハおざるませんヨ私が内密でお房様の
お出しゞあり て参つさのでおざるまへくらお出きんハうれど
お脳成まへチ赤ハ病気がうるくるつを約ませんショト
言るゞうお房の側へ近分てお声をも 京へアノよ お房さん
お家さんも家さんのうでうを見をもんでお在の中ごろふおを
中でハ悪いけまども捨て置まるひるゞうヤまへがふ来
どぞんゞ
ハ存ずでハどざるまへまへみエ きへハヤ行でおざるまへう

けん須八巻まえの病気ハ
ますせんヨ京へイヱ他のうそくハ
声を低くしてお巻が遺出をしてゝ始末を委く
物語れバさきとゞ姉妹のうのかたをの同中へ
裏うへ眼うへハ涙をうるおつく顔色を変へて涙ゝける
お言葉ハ巻次郎お房と情合のあるを始て
知りて驚けども嫉妬の心ハ更へ変へるを細やかに
語合ける



## 第廿四回

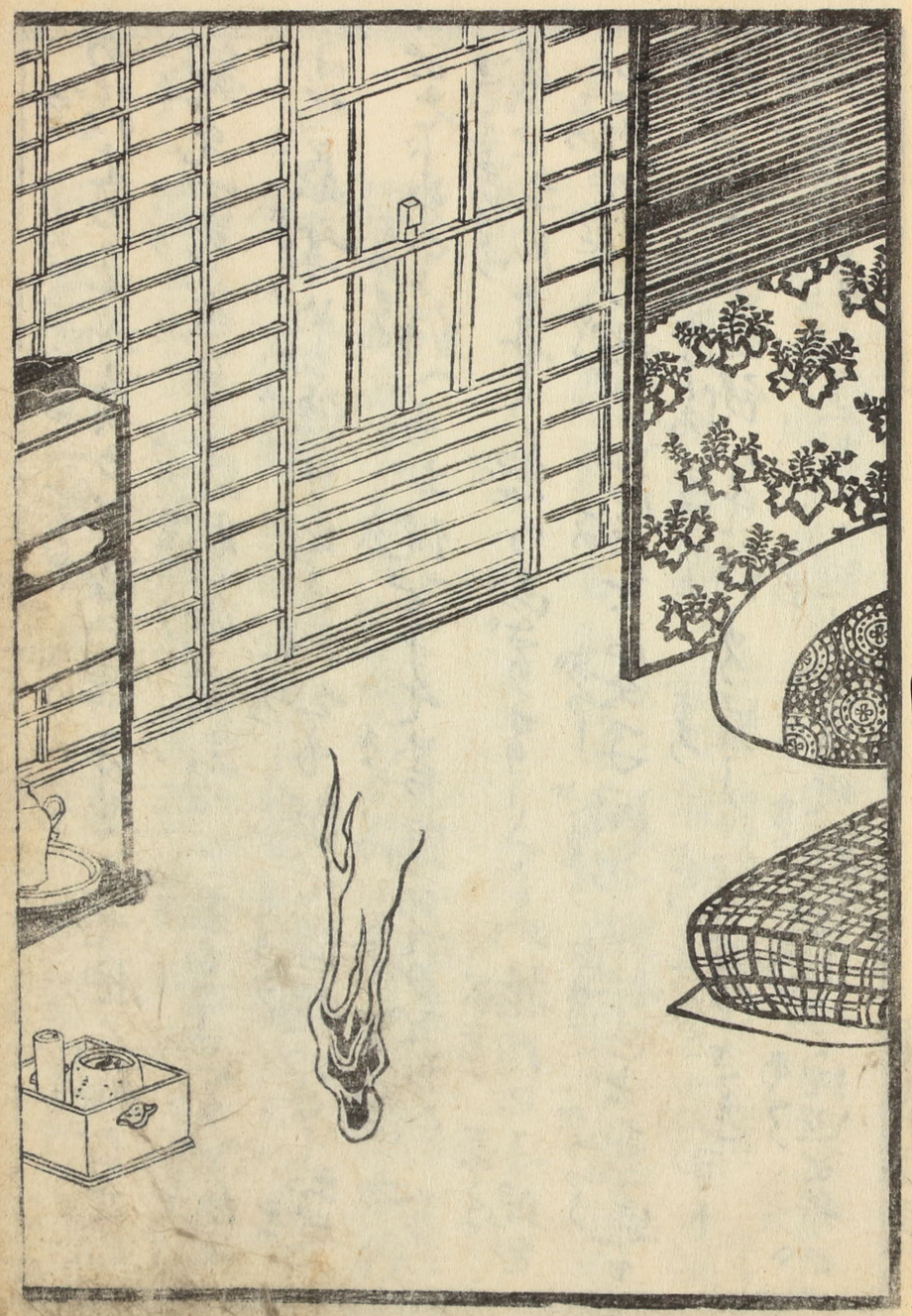
おくふ亦猿寺の地内ハ仮住居せゝ判次郎ハ彼お園の夫
ざ出しを驚ゝ一件ハ兄弟義彼是と相談して眠りもやらぎ
在けるゞ枕元なる方焼の明るく障子の音ハ
高くハ亦明るく表風の音ハ物すごく聞ゆる
折しもあまゝ雑ハ知らぬ枕元へ来るのあり
時判次郎ハ物音ハ聞きて動りもあらぬ異変覚へ
ちゞ驚ゝ枕元なるの枕元ハ座しを「サテ手洗ハ

面會に及びまいらが縁ありて不便の男一名殿下お園が
父母と小佛善左衛門と申者成未とも御お園をお見捨成
ぬ様にとこぞく今晩お願申上候様程の事
先刻堀下の茶屋人樣来りて私に御法を申聞せ
くれも嬢様の命にて拙者が深く思案も如何お園が
迷惑をうけ義中ふ手洗ますでも勝ぐ世やこそ
毒毒毒毒くかがけりこそ拙者が死後の義を甚洋へ
お願申さんと覚悟いたして居れど拙者が絶命の條



今日ふ迫り是非なく儀ふ出お願申す其巨細ハ
最長くしき恋の悪魔強ふ混雑まいる必死
の強義久しく心配いたし利害よて彼堤下へ夜
中まつてお望ふ迷惑をうけやしる彼悪姿ふ拙
者が存生の中得と後世ハ遠ふ武家の
孤と存知て家内をば去まで迷惑
頭をやうけ追出まいるハ拙者と関ふ命を捨
させやまひと深き所存の産ぞよハ知覚やさ

善左ヱ門墨を現
判ニ郎遺言を



の淺ましき松者ゝ切腹の除ゝ除んで他人知らざる
親元へ歸へしゝる迷惑の中よりまるゝ亟まりしゝる
めゝ慈悲めが濃まれ氏まきべそも解て後悔いたゝ
とたゝめ千代へもお詫をして第湯のゝをお紙とカス
義とお成きまゝ然もおざりまゝしゝべ孤閉の小兒を
お屋のひと彼ゝお屋を寡子同扱ゝ仕きと業通も
彼さふが不思所へ千代より宣ゝく解分下さきヨト
細密ふ彩むと思へば眠りハ見て拭を上つ巴辺を看ば

暁の鐘の音の程をけまべコヲ〳〵と
陽の気紋發して告げ渡り頃て朝日の朗ハ閨中の両
戸へさゝ入て朝勤めの御経の声ハ本堂の方ゆて
聞えけり

備ふ志ゝる御閨ハ小佛善ゝ浪
人と在し時男ハ女ふしゝる御八重とりふゝく
腹ふ出生しゝる娘ゝ未茂弋の時母と傷ゝ縁
切て大佛の家人浮乗ゝ父の家賀を継けるゞ

父の死後はいろ〳〵とすること〳〵年八父が一味の者を接合
主君大佛の家を押領せんと巧〳〵とする家督を
継で十余年をすぎ〳〵こゝ分家のうちて衝〳〵ゝ顯はれ
る様子のうふんとなりをひとりの善悪のみ苦る
めめ〳〵しく小衆手身へおしもあぐるるれど
実の父が母〳〵回悪ろ〳〵と逃るくゝ乃ち元
来関家の童役なれば切腹の覚悟を極めしが
手〳〵身の母〳〵悪るすあもめぐどしてお孫を斷へ



先祖への不孝なりせうて血脈を殘さんとすることなり
なるを思ひ出そ音信を絶せ〳〵実のお園をまと
なく尋ね出〳〵義見世の樣を買てもらせ且女房
の里も斷絶しそうう〳〵の死後こゝへお園と同居
させそうが種を産出すべお園の姙り合子ゝ
育させんとたくふ〳〵るなりとど
判へコウ〳〵お園さん手ノ貝を覚さるゝ。已初ぐ〳〵あ
アイお屋敷の八郎さんハ手ノ帰りまして久判へ五分ぐと

ものご　まへヤ　私　まやア　夢を見さのうみエ。アノウ今さの
旦那とのものハ私の実の父様ぢんごと言て来しく私ハ
るとさ弟のうを言て　聞せて今様　方の所へ行さ女へ
義理ある母ハるのごうと大ぐるものハして金乗が生れさとば
継母と二人で守ぞてく先祖の跡を立る様よして
それ　ぞうと言まし　判へハテナ　然して　さうを此身の現ハ
見をさのも　まへエイ　丈ぢヤ　お茶　さんも　何ら　義を　お見の
久　判へ　結ぶ　分でも　お茶の　父様ぢんごと言て　種くのうを

頼む様でもあるこが夢のハ様でハ　あるうさうハ　何様も　不思議
とうごト言ごうハ　雨戸を不残　くるを明て　四辺を　片づけて
掃出さんとして　家を　義ふる　枕元の　方を　看れば　紙ハ
包みし　小判二十両　あり　小伴　善左ふと　書付　てあり　よく
常ふのうふ　さまば　判　法帯も　お園も　五ハ　顔を　見合せ
溜息をつくばかりあり　しばらさぶハ　お園ハ　腹の　情ふれば
親　ふ　きけども　気味　悪く　番屋を　見まハし　ものう　判へ
さんなら　怖ひよへトハ　ふ　様　極頼の　外ハて　何の　言ら

ねどがタ〳〵ガラアリ　と寄きこまれバ猫寄きこの「ア」
エリ　と変ふり　判次郎ふ　ちぐ〳〵　付き色　青ざめて
身を振ハー　編こあぐる　この時の陳子の外の猫のぐ
命の変ギャアリ　キャアリ　ニャア　判「うんどちく〳〵やうの人猫ぐ
喧嘩をまるのぐ　そふぐ　この「ヲヤ〳〵　鍵ク人　宮ふ　ちく　仏
猫の胸ク　ちまー　ちらくアリ　怖ろこ　コレちとろと　付胸ぐ
押へ　そ　猫　仏猫ふマア　動ぐ　仕ましぐ　判「ドレく
この「アレサ　甚所　ドヤア　ちふ　ヨホ〳〵　あアーふ　エ　ヲヤ　私ヤア

ちぐ　公二　ちぐ　ちぐが　付ぐ　ふ　居ま　ちく　ふ　仏猫　せう　ふ　エ　判「ナヲ〳〵
仏猫　ちぐ　この「アノウ　眼　表　素足　ふ　出　ちく　途中
怪　ぐ　怪　ぐ　ふ　ふ　血ぐ　付　ふ　居ま　ふ　判「　ちく　公二と
ちぐ　ちぐ　ちぐ　ドレ　着せる　痛　ふ　ちく　この「イエ　公二
痛　ちく　ア　有ま　せんヨ　判「　ぐ　ちく　ぐ　ぐ　怪　我　ま　ま　て
陳　ちく　ふ　大　ぐ　の　お　猫　ふ　ちく　ぐ　ト　ふ　時　も　隣　家　の　住
猫　ちく　の　声　の　て　「　ち　判　ん　眼　表　ハ　お　客　ま　ふ　で　ぐ　ま　ま　判「
イエエ　「ヲヤ　お　陳　ぐ　ま　の　丁　屋　人　の　表　ぐ　同　え　ま　ま　よ

お園さん世に私の所へ来て戀情侯るなら。
私きやア見へ今来まし〜とは言へども先ず判金の
額を見て嬉しそうな安へ金ゆも代報く思ふべし

江戸作者　在訓亭　爲永春水

江戸画工　獨醉舍　歌川國直

春色梅美婦禰巻之十二了

真夜の一つ
世たまよる
ほたるゆめ
杉柳亭
貞山